

保育者に求められる音楽技能についての一考察 —アンケート調査の結果から—

松本晴子¹
伊藤哲章¹
守 渉¹
井坂 恵²

保育者にはある程度の音楽技能を備えていることが求められていると一般的に認識されている。現在本学では、教育学科幼児教育専攻が保育者養成を担っているが、これまで設定されているカリキュラムが音楽技能の習得に適応しているかどうかについての確認が行われることはなかった。また保育現場に就職した卒業生は大学での学びをどう振り返っているか、また保育現場で働きながら音楽技能をどのように感じているのかについての検証が行われた記録も見あたらなかった。

本研究は、これらをふまえ次の3つの立場に焦点をあてアンケート調査を実施し、保育者に求められる音楽技能について検討を行った。第1に保育現場に就職した同窓生は音楽技能の大学での学びをどのように感じているか、現場で必要な音楽技能をどう捉えているかについてである。第2に保育現場ではどのような音楽技能を備えた学生を求めているのかについてである。第3に幼児教育専攻の在學生は音楽技能をどう考えているのかについてである。アンケートを実施するにあたっては、それぞれの立場にあった質問内容を考慮した。

その結果、同窓生は、もっと大学時代に学びたかったこととして「ピアノの演奏技能」、「子どもの歌の伴奏」、「コード伴奏法」であることがわかった。保育現場では第1に手遊びを重要視していること、第2にピアノの技能はバイエル終了程度を求めていること、第3に音楽表現活動に関する豊かな感性が大切と認識していることが示された。在學生は、継続したピアノ技能の学びを求めていること、ピアノの技能は初心者と経験者の二極化になっていることが明らかになった。

Keywords : 保育者、アンケート調査、ピアノ技能、音楽指導、音楽カリキュラム

1. 本研究の背景と目的

保育者養成に携わる機関は専門学校、短大、大学と多様であり、資格の取得に関しては通信教育（一部スクーリング）などでも可能となっている。

ところで、一般的に保育者にはある程度の音楽技能を備えていることが求められていると認識されていることから、保育者養成に携わる機関において音楽技能にかかわる調査研究は、これまで数多く報告されている。たとえば、平石葉子は日本全国の幼稚園、保育所にアンケート調査を実施し、

養成校に求める音楽教育の結果として幼児曲指導、弾き歌い指導、ピアノ曲の指導、歌唱力が求められていることを報告している¹⁾。

本学の保育者養成は1955年に宮城学院女子短期大学保育科が設置されてから短大としての45年間、2000年には4年制の大学となり発達臨床学科として新たに出発した。その後、2016年には教育学科幼児教育専攻となり保育者養成は受け継がれてきている。これまで5511人²⁾が巣立っており幼稚園、保育所（園）、こども園の現場で数多くの卒業生が活躍している。

ここで、短大時代の音楽技能に関わるカリキュラムと4年制大学に移行した時のカリキュラム、

1. 宮城学院女子大学教育学部教育学科
2. 宮城学院女子大学芸学部音楽科

現行のカリキュラム³⁾について整理してみたい。

短大時代は1993年度入学者適用のカリキュラムを参考とした。その資料によると、1年次にはいずれも1単位必修科目で、保育内容表現A（音楽リズムⅠ）、音楽A、音楽B科目が設定されている。2年次にはいずれも1単位選択科目で保育内容表現B（音楽リズムⅡ）、音楽C、音楽D科目が設定されている。音楽Aは音楽理論とソルフェージュ、音楽Cは指導法などに関わる内容で、音楽BとDはピアノ実技に関わる科目で、通年科目1単位に設定されている。

次に4年制となった2000年度入学者適用の発達臨床学科のカリキュラムをみてみたい。1年次は2単位必修で保育内容の基礎A（表現）、2年次は、いずれも2単位で、後期科目保育内容の研究A（音楽表現）、音楽実技Ⅰ（ピアノ実技）は通年で教職選択・保育士必修科目となっている。音楽論は教職選択必修で設定されている。3年次は音楽実技Ⅱ（ピアノ実技）が教職選択必修科目・保育士選択科目の通年科目2単位で設定されている。

2002年度入学生適用のカリキュラムは、音楽実技Ⅰが通年科目として1年次に移動し、音楽実技Ⅱが3年次に通年科目で開設されている。

2004年度入学者適用のカリキュラムは、1年次に音楽実技A（ピアノ実技）と科目名が変わり、2000年以来通年科目で2単位であったピアノ実技科目が通年科目で1単位に変更になっている。音楽論は1年次開設に移動している。2年次は音楽実技B（ピアノ実技）に科目名が変わり2単位選択科目となっている。1年次に開設されていた保育内容の基礎A（表現）科目はなくなり、保育内容の研究A（音楽）が2年次に2単位で開設に変わっている。

2007年度入学者適用カリキュラムは、1年次に保育内容（表現）が必修2単位で開設され、2年次は保育内容指導法（音楽）に科目名が変更となり2単位となっている。また音楽実技B（ピアノ実技）が前期選択科目となり1単位となっている。

2008年度入学者適用カリキュラムでは、1年次

前期科目音楽実技A、2年次前期科目音楽実技Bの単位数が1単位から2単位に変わっている。この2008年度のカリキュラムは、2015年度入学生適用まで継続される。

2016年度から教育学科幼児教育専攻入学者適用カリキュラムとなる。1年次は保育内容（音楽表現）が後期科目2単位必修、基礎ピアノが前期科目1単位選択となり、音楽が2単位教職選択必修、保育士必修となり現在もこのカリキュラムで行われている。

以上から、4年制に移行した2000年度入学生から2003年度入学生までは、2年次と3年次、もしくは1年次と3年次のように学年をまたがり音楽実技科目を学ぶカリキュラムが設定されていたことがわかった。また2004年度から2015年度入学生までは1、2年次にまたがり学ぶ科目開設になっていたことが確認された。

保育者養成として4年制に移行してからも複数学年にまたがって系統的に音楽実技科目を学ぶことができるカリキュラムが設定されていたが、教育学部となった現在は1年次半期のみの音楽実技科目の学びのカリキュラムに変更されていることが明らかとなった。積み上げの学びを絶ってしまうようなカリキュラムに変更したのは、本学学生の実態にそったものであったのだろうか。

このような現状をふまえつつ、本稿では保育者に求められる音楽技能について考察するために、アンケート調査を実施しその結果から検討を進めることとした。

2. アンケート調査の対象者と方法

2-1. 調査対象者

アンケート調査を実施するにあたり調査対象者をどのようにするかについて検討を重ね、次の3つの立場から調査を実施しその結果を総合的に考察することとした。第1に本学の卒業生、第2に幼稚園、保育所（園）、こども園など現場の機関、第3に幼稚園教育実習、保育実習に臨む、または実習を終えた学生である。具体的には次の通りである。

第1について：2016年3月卒業生（発達臨床学科）～2020年3月卒業生（教育学科幼児教育専攻）400名である。以下同窓生と記すこととする。

第2について：仙台市を含む宮城県内の幼稚園、保育所（園）、こども園657ヶ所である。以下現職と記すこととする。

第3について：2021年度教育学科幼児教育専攻1年生～4年生379名である。以下在學生と記すこととする。

2-2. 調査期間及び調査方法

調査は、2021年8月上旬から10月下旬に実施した。同窓生については、Google FormsのURLを葉書きに記し、同窓会の協力を得て発送し回答を得ることとした。現職についてはGoogle FormsのURLをハガキに記して発送し、回答を得ることとした。在學生については、学内の授業支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）を利用し、Google Formsによる回答方式をとった。

2-3. 回答率

同窓生からは85（回答率21.3%）、現職からは215（回答率32.7%）（内訳 幼稚園51 保育所（園）136 こども園25 その他3）、在學生からは156（回答率41.2%）の有効回答数を得た。すべて有効な回答であった。同窓生からの回答数が予想より少なかったのは、卒業後に結婚、転居、転職などによって生活の変化が生じたことが要因のひとつとして考えられる。現職からの回答数は多く、現場の声を反映することができるものとなった。在學生からの回答数は予想より少なかったのは、3年生に最後の実習前の学生がいたことと1、2年生は実習経験がないことなどの要因が考えられる。

得られた回答の集計結果については、同窓生、現職、在學生の順に次に記すこととする。

3. アンケート結果と分析

アンケート結果を集計するにあたって、同窓生と現職については、勤務先の状況によって回答が

異なることが予想されたことから、幼稚園、保育所（園）、こども園に分類し集計を行った。それぞれの結果は次の通りである。

3-1. 同窓生の結果と分析

(1) 主な音楽活動について

表1 勤務先別の主な音楽活動

	割合
A 幼稚園	
a 生活の歌（朝の会、おべんとう、帰りの会など）	84%
b 園歌、宗教の歌、園独自の歌	5%
c 季節の歌	11%
d 手遊び歌	0%
e すべて担任の裁量に委ねられている	0%
B 保育所・保育園	
a 生活の歌（朝の会、おべんとう、帰りの会など）	53%
b 園歌、宗教の歌、園独自の歌	8%
c 季節の歌	24%
d 手遊び歌	10%
e すべて担任の裁量に委ねられている	6%
C こども園	
a 生活の歌（朝の会、おべんとう、帰りの会など）	75%
b 園歌、宗教の歌、園独自の歌	25%
c 季節の歌	0%
d 手遊び歌	0%
e すべて担任の裁量に委ねられている	0%

主な音楽活動は、幼稚園、保育所（園）、こども園において、いずれも「生活の歌」が一番高い回答率であった。特に幼稚園は84%と高く登園から降園までの間に、何らかの「生活の歌」を歌っている園が多いことが明らかとなる結果が得られた。保育所（園）では「季節の歌」を24%、こども園では「園歌など園独自の歌」を25%歌っており、音楽活動においては、「生活の歌」を中心としながらも多様な歌を歌っていることがわかった。

歌うという活動が幼稚園、保育所（園）、こども園それぞれにおいて大きな位置をしめていることがあらためて示されたといえる。

(2) ピアノを弾く回数について

表2 勤務先別のピアノを弾く回数

	割合
A 幼稚園	
a 毎日	100%
B 保育所・保育園	
a 毎日	33%
b 週2、3回	8%
c 月に数回	14%
d 年に数回	16%
e ほとんどない	29%
C こども園	
a 毎日	33%
b 週2、3回	8%
c 月に数回	25%
d 年に数回	17%
e ほとんどない	17%

ピアノを弾く回数は、幼稚園では「毎日」と回答した割合が100%であった。登園から降園の間には必ず保育者がピアノを弾く機会があることを確認することができた。一方、保育所（園）とこども園では「毎日」と答えた割合は、どちらも33%であった。また、保育所（園）では、「ほとんどない」と回答した割合が29%とほぼ3割であった。「年に数回」は16%であり「ほとんどない」と合わせると45%に、「月に数回」14%も加えると59%と半数以上、ほぼ6割の保育所（園）ではピアノを弾く回数があまりないことが示された。こども園においては「月に数回」が25%、「ほとんどない」は17%で、保育所（園）よりは少なかったが、毎日以外の比率が59%になることから、やはりほぼ6割の園が、保育所（園）と同じようにピアノを弾く機会はあまり多くないことが示された。

表1では幼稚園、保育所（園）、こども園ともに歌う活動が多く行われていることが示されたが、ピアノを弾いて歌うという活動がすべてではなく、CDなど音響機器を用いて歌う活動が行われていることが推測される結果といえる。

(3) 音楽活動で困っていることについて

表3 音楽活動を行うにあたって困っていることの有無

	割合
A 幼稚園	
a ある	37%
b ない	63%
B 保育所・保育園	
a ある	25%
b ない	75%
C こども園	
a ある	42%
b ない	58%

音楽活動を行うにあたって困っていることについては、幼稚園63%、保育所（園）75%、こども園58%といずれも「ない」の回答の割合が高かった。ただし、「ある」との回答も幼稚園37%、保育所（園）25%、こども園42%と4割ほどあることから、具体的にどのようなことに問題を感じているのかについて、今後明らかにしていくことが求められる。

(4) 大学時代に学びたかったことについて

表4 大学時代にもっと学びたかったこと

	割合
A 幼稚園	
a ピアノの演奏技術	16%
a ピアノの演奏技術	5%
b 子どもの歌の伴奏	42%
c コード伴奏法	26%
d 読譜	5%
e 特になし	11%
B 保育所・保育園	
a ピアノの演奏技術	31%
b 子どもの歌の伴奏	18%
b 子どもの歌の伴奏	2%
c コード伴奏法	25%
d 読譜	0%
e 特になし	25%
C こども園	
a ピアノの演奏技術	25%
b 子どもの歌の伴奏	42%
c コード伴奏法	8%
d 読譜	0%
e 特になし	25%

幼稚園とこども園では「子どもの歌の伴奏」と回答した割合がともに42%と高かった。保育所(園)では、「ピアノの演奏技術」が31%と高い割合を示した。また、「コード伴奏法」を学びたかったが幼稚園26%、保育所(園)が25%であったことから、コード伴奏法を身に付けることへの期待を読み取ることができる。

表2の結果では、保育園(所)において、ピアノを弾く機会は実際の保育の場面ではほとんどないという回答が高かったが、学びたかったこととして「ピアノの演奏技能」、「子どもの歌の伴奏」、「コード伴奏法」の回答率が高かったことは、大学での学びに期待するものが多いことが示されたといえよう。実際現場で使用するかしないかにかかわらず、音楽技能の力を身に付けた保育者になりたいと考えていることを読みとることができる。

3-2. 現職の結果と分析

(1) 経験年数について

表5 保育者としての経験年数

	割合
A 幼稚園	
a 1年～5年	22%
b 6年～10年	12%
c 11年～20年	18%
d 21年～30年	20%
e 30年以上	29%
B 保育所・保育園	
a 1年～5年	9%
b 6年～10年	17%
c 11年～20年	25%
d 21年～30年	29%
e 30年以上	21%
C こども園	
a 1年～5年	16%
b 6年～10年	28%
c 11年～20年	36%
d 21年～30年	16%
e 30年以上	4%

現職の回答者の経験年数は、幼稚園は「30年以上」が29%、「21年～30年」が20%であり、保育所(園)は「30年以上」が21%、「21年～30年」が29%であった。両者とも回答者の半数がベテランと言われる経験を積んできている保育者で

あったことがわかる。一方、こども園は、「11年～20年」が36%、「6年～10年」が28%であり、中堅者の回答が多かったことが示された。これは本研究の調査に回答したのは、7割のベテランの保育者、中堅の保育者であり、本研究に保育現場、保育経験者の声が強くと捉えることができる。

(2) 養成校に期待する音楽技能について

表6 養成校に期待する音楽技能について

	割合
A 幼稚園	
a 手遊びをたくさんできるようになってほしい	78%
b ピアノが弾けるようになってほしい	22%
c 歌を歌えるようになってほしい	0%
d 合奏指導ができるようになってほしい	0%
B 保育所・保育園	
a 手遊びをたくさんできるようになってほしい	84%
b ピアノが弾けるようになってほしい	10%
c 歌を歌えるようになってほしい	4%
d 合奏指導ができるようになってほしい	2%
C こども園	
a 手遊びをたくさんできるようになってほしい	80%
b ピアノが弾けるようになってほしい	20%
c 歌を歌えるようになってほしい	0%
d 合奏指導ができるようになってほしい	0%

幼稚園、保育所(園)、こども園ともに「手遊びをたくさんできるようになってほしい」という回答が幼稚園で78%、保育所(園)で84%、こども園で80%と8割を占め、手遊びはかならずできる保育者を養成してほしいという願いを持っていることを読み取ることができる。

「ピアノが弾けるようになってほしい」という回答は幼稚園22%、こども園20%と2割いることから、園によってはピアノの技能を求めていることが示された。保育所(園)では、回答率は低いものの「歌を歌えるようになってほしい」4%、「合奏指導ができるようになってほしい」2%が見られ、養成校には音楽技能を幅広く身に付けた保育者を育ててほしいと期待していることが推測できる。

(3) ピアノの技能の習得について

現場において、保育者養成校にどの程度ピアノ技能を身に付けてほしいと考えているのかを明らかにするために、質問項目に設けたものである。

項目内容とした、バイエル、ブルグミュラー 25番、ソナチネ・ソナタがふさわしいのかどうかは検討の余地が残されている。特にソナチネとソナタは少し弾ける技能という意識で設定したが、詳細に見れば作曲者や曲の長さなどによってソナチネとソナタは大きく異なるものである。ただし、ベテラン保育者、中堅保育者には伝わりやすい教則本や音楽様式名であったのではないかと考える。

表7 学生時代にピアノの技能をどの程度習得してほしいか

	割合
A 幼稚園	
a バイエル終了程度	53%
b ブルグミュラー 25番終了程度	31%
c ソナチネ・ソナタ習得程度	6%
d 必要ない	10%
B 保育所・保育園	
a バイエル終了程度	73%
b ブルグミュラー 25番終了程度	18%
c ソナチネ・ソナタ習得程度	2%
d 必要ない	7%
C こども園	
a バイエル終了程度	56%
b ブルグミュラー 25番終了程度	16%
c ソナチネ・ソナタ習得程度	8%
d 必要ない	20%

学生時代にピアノの技能をどの程度習得してほしいかについては、「バイエル終了程度」が幼稚園53%、保育所（園）73%、こども園56%と高い回答率であった。このことは現場では、「バイエル終了程度」のピアノの技能を身に付けてほしいと考えていることが示されたといえる。

幼稚園においては、「ブルグミュラー 25番終了程度」が31%の回答が得られたことから、ピアノを弾ける力をより期待していることを読み取ることができる。「必要がない」と回答している現場があることの要因については、今後追跡調査が必要といえよう。

(4) 保育者の音楽の専門性について

表8 保育者の音楽の専門性として重要と考える事項

	割合
A 幼稚園	
a 音楽表現活動に関する豊かな感性	78%
b 音楽表現活動に関する技能	14%
c 音楽教材を作成・活用する能力	6%
d 音楽表現活動の指導法の習得	2%
B 保育所・保育園	
a 音楽表現活動に関する豊かな感性	89%
b 音楽表現活動に関する技能	5%
c 音楽教材を作成・活用する能力	4%
d 音楽表現活動の指導法の習得	1%
C こども園	
a 音楽表現活動に関する豊かな感性	68%
b 音楽表現活動に関する技能	28%
c 音楽教材を作成・活用する能力	0%
d 音楽表現活動の指導法の習得	4%

保育者の音楽の専門性として重要と考える事項は、いずれも「音楽表現活動に関する豊かな感性」が、幼稚園78%、保育所（園）89%、こども園68%であった。保育所（園）では9割近く、幼稚園は8割近い。こども園は7割近いことが示された。これは、保育者に求めるものが豊かな感性であることを読み取ることができる。また、こども園においては、「音楽表現活動に関する技能」への回答が28%と3割近くあったことから、音楽表現活動には技能が大切であると考えていることがわかる。「音楽表現活動の指導法の習得」については、幼稚園2%、保育所（園）1%、こども園4%とそれほど高くなく、指導法を身に付けることには期待していないことを読み取ることができる。

3-3. 在学生の結果と分析

(1) 大学入学前のピアノの経験について

表9 大学入学前のピアノのレッスン経験

	割合
a 未経験	31%
b 1年未満	4%
c 1年以上2年未満	6%
d 2年以上3年未満	4%
e 3年以上4年未満	4%
f 4年以上5年未満	4%
g 5年以上10年未満	29%
h 10年以上	17%

大学入学前のピアノのレッスン経験は、「未経験」が31%であり全体の3割は未経験ということが示された。一方、「5年以上10年未満」は29%、「10年以上」は17%と回答しており合わせると46%になることから、半数弱の学生がレッスン経験が長いことがわかった。このことは、未経験者とレッスン経験者の二極化構造になっていると読み取ることができる。授業を進めるにあたって、技能に合わせたグループ編成の工夫、未経験者への指導を充実させるために時間を確保するにはどうしたらよいかなど学生の実態に合わせた科目運営が大切といえる。レッスン経験のある学生には新しい技能、楽曲の提示、基礎の見直しなどの工夫が必要となる。

(2) 入学後のピアノレッスンの状況

表10 個人でのピアノレッスンの状況

	割合
a 週に1回程度習っている	3%
b 月に2、3回程度習っている	1%
c 不定期に習っている	3%
d 習っていない	94%

入学後に個人でピアノレッスンに通い続けているかどうかについては、「習っていない」が94%であり大学入学後は個人的に習っている割合は低いといえる。表9で明らかになったように10年以上のレッスン経験者もおり、割合は低いもののレッスンを続けている学生が7%いることを留意しなければならない。

(3) ピアノ実技の履修状況

表11 大学入学後のピアノ実技に関する科目の履修状況

	割合
a 履修した	96%
b 履修していない	4%

大学入学後のピアノ実技に関する科目の履修状況は、「履修した」が96%であった。ピアノ実技に関する科目は選択科目となっているが、保育者には必要と考え履修している状況であることが示された。

(4) 大学4年間で学びたいピアノ実技の期間

表12 大学4年間でどのくらいピアノを習いたいと思うか

	割合
a 1年前期のみ	13%
b 1年前期～1年後期	14%
c 1年前期～2年前期	11%
d 1年前期～2年後期	19%
e 1年前期～3年前期	13%
f 1年前期～3年後期	7%
g 1年前期～4年前期	3%
h 1年前期～4年後期	21%

「大学4年間でどのくらいピアノを習いたいと思うか」という問いでは、「1年前期～4年後期」の回答が21%、「1年前期から2年後期」が19%と高い割合となっている。4年間もしくは2年間の継続した学びを求めていることが示された。その次に多いのは「1年前期から1年後期であり、87%という9割近くの学生が通年の学びを求めていることが明らかになった。

(5) ピアノ実技への不安

表13 ピアノ実技に対する不安

	割合
a 全く不安はない	19%
b やや不安である	25%
c 少し不安である	17%
d 非常に不安である	38%

ピアノ実技に対する不安は、「非常に不安である」と回答した在學生は38%であった。「少し不安である」と回答した割合を合わせると55%の在學生が不安を抱えていることになる。これは表9により未経験者が3割いることと弾き歌いという歌いながら弾く技術についての不安があるのではないかということが推測される。

(6) 実習におけるピアノ実技の状況

表14 実習においてピアノを弾く機会はありましたか(3・4年生のみ)

	割合
幼稚園実習	
a 毎日弾いた	25%
b 配当年齢によって弾く機会があったりなかったりだった	42%
c 全く弾く機会はなかった	20%
d 実習には行っていない	12%
保育実習	
a 毎日弾いた	22%
b 配当年齢によって弾く機会があったりなかったりだった	34%
c 全く弾く機会はなかった	35%
d 実習には行っていない	10%

実習でピアノ(キーボード)を弾く機会は、幼稚園実習では、「配当年齢によって弾く機会があったりなかったりだった」が42%と高い割合を示した。「毎日弾いた」は25%あり、7割近くがピアノ(キーボード)を弾く機会があったことが示された。

一方、保育実習では、「配当年齢によって弾く機会があったりなかったりだった」が34%、「全く弾く機会はなかった」が35%とほぼ同等の割となった。ただし「毎日弾いた」が22%あり、実習園によっては保育実習でもピアノ実技の力を求められるといえる。

4. 考察

以上のようにアンケート結果からは、多くの示唆が得られた。ここでは、表8で得られた保育者の音楽の専門性として重要と考えることについての回答で、「音楽表現活動に関する豊かな感性」が、

幼稚園78%、保育所(園)89%、こども園68%であり、保育所(園)では9割近く、幼稚園は8割近く、こども園は7割近いことが示されたことに着目し考察したい。

感性については、ルソー、カントなどの哲学者をはじめ心理学者など古今東西多くの人によって定義付けがなされたり議論が行われたりしてきている。ここでは高橋史朗の「感性は、体験を通してしみじみと実感し、意味や価値に気付く能動的な働きのある感覚を生み出す能力であり、問題解決や思いやり、意思などにも結びついている」⁴⁾という指摘をふまえて考えてみたい。

荒木紫乃は、乳児はリズムを母親と共有することにより音声表現(言葉や歌)を獲得していくこと、母親の発することば(母国語)や歌いかけ(音楽)の音韻と音楽体系にあてはまる知覚および認知を獲得していくことをふまえて、乳児期には肉声での歌いかけ、話しかけが必要であることを述べている⁵⁾。さらにこの荒木の報告は、現在の保育現場においては、CDや音響機器、メディアなど用いている場面が少なからずあることに危機感を持っていること、たとえ実習でその場面を見たとしても、学生には肉声の大切さに気付く肉声で実践することを試みてほしいという願いが記されている。この肉声の意味に気付くということは、高橋のいうところの意味や価値に気付く能動的な働きのある感覚を生み出す能力が感性であるという考え方と重なるといえよう。保育者として、肉声の意味と価値をふまえた保育実践を心がけることは必要なことである。

また片岡徳雄は感性について次のように述べている。感性とは知性や感情の働きを起こさせる初発であり、刺激に対する敏感さであり、驚きの反応である。その人が何に対して敏感で、何に驚くのかはその人の選択、働きかけによるが、「感性とは「価値あるものに気付く感覚」である⁶⁾。この片岡の刺激に対して敏感であり驚きの反応であること、感性とは価値あるものに気付くことであるという主張と、高橋の感性とは体験を通してしみじみと実感し、意味や価値に気付く能動的な

働きのある感覚であるという考えはほぼ共通すると言ってよいのではないだろうか。

そして片岡は、子どもの感性を育むヒントを得ようと「ねむの木学園」の宮城まり子にインタビューを行い次の3つを要点として記している。第1は子どもへヒントを与えることである。例えば、風が吹いてきたこと秋の風であることを言うて木を見ることはしても、黄色くなっているということまでは言わない。第2にそのヒントを教師はどのような言葉で言うかということである。例えば、海だと言ってそれを子どもの目に止まるようにするのが大切なことである。第3に子どもが五感で感じ、想像するように配慮することである。例えば、外国の石畳は土ではないから歩いた人の分だけ減ることを伝え、石畳の上を歩かせる。

片岡はこのインタビューで得た、子どもは信じる人へのコミュニケーションとして気付いたり感じたりしたことを表現するという宮城の信念を受け、「子どものコミュニケーションや表現を引き出し、伸ばすために、指導者は子どもに教え込むのではなく、ヒントを与え感じさせる」⁷⁾ことが重要でありそれが子どもの感性を育むことになることと結んでいる。

このように感性について考えてくると、あらためてレイチェル・カーソンが述べていることばに立ち返らされる。それは、子どもに生まれつきそなわっている「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、よるこびや感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合える大人がそばにいる必要があるということ、「知る」ことより「感じる」ことの方が重要である⁸⁾ということである。

以上から、保育者にとっての音楽活動における豊かな感性は、子どもと活動を共にしながら、例えば大きな激しい音に驚いたり、速さやリズムの違いに気付いたり、美しい音に心が動かされたりなど子どもと一緒に発見したり嬉しくなったり楽しんだりできること、音楽表現の喜びを感じる力を持つことと捉えたい。

音楽表現はどうしても模唱、範唱、範奏するなど型の活動が中心になりやすい。もちろん初めての楽曲を子どもに伝えるには範唱や範奏は欠かせないものである。しかしその先の繰り返し活動において、教えるではなく子どもの気付きを引き出すようなヒントとなる言葉を提示できるように努力することは、保育者として取り組めることと言えるのではないだろうか。

5. 本研究のまとめ

本研究は、保育現場において音楽技能と音楽活動にかかわる多様な力がどのように捉えられ、求められているのかについて探るために、アンケート調査を基に検証を行った。

その結果、卒業生が大学時代にもっと学びたかったことは、「ピアノの演奏技能」、「子どもの歌の伴奏」、「コード伴奏法」であることが示された。

保育現場の声は次の3つに集約することができる。第1に「手遊びがたくさんできること」が求められていることである。第2にピアノの技能は「バイエル終了程度」は身に付けてほしいと考えられていることである。第3に「音楽表現活動に関する豊かな感性」を持ち合わせていることが重要と認識されているということである。

学生の実態、意識からは次の2つが示された。第1に「ピアノ実技は継続した学びを望んでいる」ということである。第2に「ピアノの未経験者と経験者の二極化がはっきりしている」ということである。

「音楽表現活動に関する豊かな感性」についての考察では、保育者は音楽活動を子どもと一緒に楽しみ、驚き、喜び、心が動かされることであり、教えるのではなく気付くようなヒントを提示する力を持つことと捉えた。

これらをふまえて、本学教育学科幼児教育専攻における音楽技能に科目のカリキュラムを検討するにあたって、本研究で得られた知見をふまえながら考察を進めていきたい。

本研究は、2021年度発達科学研究所共同研究の補助金を得て行った研究成果の一部である。

註・引用文献

- 1) 平石葉子「幼稚園、保育所から保育者養成校に求められている音楽教育」『奈良保育学院研究紀要』16、2014、pp.81-89.
- 2) 宮城学院同窓会より次のような資料提供を受けた。短大保育科（第1回～45回）1957年3月卒～2001年3月卒3873名、発達臨床学科（第1回～18回）2002年3月卒～2019年3月卒1464名、教育学科幼児教育専攻（第1回～2回）2020年3月卒～2021年3月卒174名。このことから総計5511名となる。
- 3) 宮城学院女子大学教務課に保管されている教育課程表から検討を行った。
- 4) 高橋史朗『臨床教育学と感性教育』玉川大学出版社、2004、p.86.
- 5) 荒木紫乃「学生の音楽的感性を育てる」『日本保育学会大会研究論文集』51、1998、pp.822-823.
- 6) 片岡徳雄『子どもの感性を育む』日本放送出版協会、1993、pp.74-75.
- 7) 同上書 pp.131-133.
- 8) レイチェル・カーソン、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社、1996、pp.23-24.